

【Re】湖の騎士 異聞録

春雷海

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神秘にあふれていたその時代に一人の騎士が消えた。

騎士が消えたことにより王は死に、王国は崩壊した。

それから長い年月を経たことで——神秘は失い、人理が焼却する時代になり……騎士は帰ってきた。

これはその騎士と仲間たちの物語（日常）である……。

※湖の騎士 異聞録（旧題偽・湖の騎士伝）のリメイクです。

また基本的にこのリメイク作品と前回作品のランスロットの設定は変更なしで、基本的に同様の立ち振る舞いでやっていきます。

しかし物語に変更がございますので、宜しくお願い致します。

またこちらは短編集の投稿で、基本的に一話完結でやっていきます

——可能性として何話か続くものもありますが。

リメイク作品もよろしくお願いします。

目次

日常

召喚と再会	1
戦力増加（剣士と槍兵）	7
騎士と聖女とマスター	13
背中と夢	19
叛逆と殺人鬼	24
彼を巡って召喚☒	29
湖の乙女	33

日常

召喚と再会

まだ世界に神秘が溢れていた、アーサー王の時代。

円卓の騎士の中で最も名を挙げられている騎士がいた。

その騎士は自らの愛を全て王に捧げ、己に恋慕を抱く乙女に目を向けなかった。

騎士は円卓の中で最強と謳われていた。

騎士は王よりも信頼が厚かった。

騎士は養子を愛し、時に業務よりも養子を優先にしていた——その子も父の背中を追って騎士となった。しかし母親については不明。

騎士が振るう宝剣と纏う鎧に曇りなき純粹な想いが込められていた。王のために、そして民の為に蛮族を討った。

様々な悪と闇を、彼は討伐していった。

誰よりも騎士として生きた彼の名は——サー・ランスロット。

彼は様々な武勇を誇り、自身の愛剣アロンダイトがありながら、数多の武具を使いこなしている。

幾つかの伝説を築き、王からの信頼も厚く、騎士たちからも慕われ、正しく理想の騎士として謳われていた。

彼に想いを寄せる乙女たちも多かったが、そこは閑話休題。

彼の武勇には様々な逸話が存在している。

特に挙げられるのが暗黒騎士討伐、天下を切り開く冥界の剣を持つ王と黄泉の騎士団、他にも楡の木の枝で戦ったこと、蛮族と魔竜の討伐——また武勇だけでなく、初めて女性騎士を取り立てた人物でもある。

そして、武勇で埋もれてしまっているが、もう一つ有名なものがある——それは戦時中に騎士たちに自らの食糧を振り分け、彼自身は周囲にいた動植物を手当たり次第に食べたらしい。喩えそれが蛇だろう

が虫、得体の知れないものも焼いて食べた。

それを見た騎士たちは彼と同じものを食べたという……少しでも彼に近づきたいがために。

そんな彼を題材にした作品も多く、円卓の騎士と謂えばランスロットと云われるほどだ。

そしてアーサー王を主人公とする英雄譚として創作された『アーサー王の物語』では、幾つかの伝説を築き上げながらも、王妃ギネヴィアとの不義の愛でブリテン崩壊の切っ掛けを作った裏切りの騎士。しかし王妃との不義の愛はフランス人の捏造したものだ。

しかし、そんな人望が厚かった彼は消えてしまった。養子も、国も、王も、仲間も騎士としての役目を全て残して。

騎士としての名誉も立場も何もかも置いて、彼は唐突に姿を消してしまったのだ。理由も不明のまま忽然と煙のように。

円卓最強の騎士が行方不明となり。実質王よりも支持を集めていたランスロットという精神的支柱を失ってしまったブリテンは衰退し崩壊した。

やがて、崩壊に導いたランスロットは尤も罪深き円卓の騎士として謳われ——『裏切りの騎士』という名を付けられた。

故に彼はこう云われている、裏切りの騎士——サー・ランスロットと。

しかし、それはあくまで歴史を探りし者たちの見解であり、本来は異なったものである。

そして、歴史を探りし者たちも、その時代に生きた騎士や民たちも知らなかった。ランスロットは生前の記憶を引き継いでいた転生者であることを。

その転生者は死すことなく世界の裏側で戦い続けていた——幻想種を狩り食べつくしながら……。

* * * * *

「……それで？」

「……ふざけているのか？ この世界に閉じ込めたのはもとほといえ
ば、お前らが原因だろうが。手前勝手に言つて」

「別に構わん。もう空間を斬撃が可能な技ができたからな……もう
此処から出てやる」

「？ ——？ ——!?」

「謝罪してももう遅いぞ、悪いが貴様の所為で俺の息子共々王や円卓
もバラバラにされたんだ……少しばかり痛い目にあえ」

「!?!?!?!?!」

「星が悲鳴を上げようが、貴様が喚こうが知つたこつちやない——俺
は俺の大切なものを今度こそ守りに行く……たとえ遅かつたとして
もな」

細身ながらも偉丈夫まで鍛え抜かれたその身体と落ち着いた顔立
ちの若者はそう云い放ち、腰に差していた剣を鞘から引き抜く。

黒曜に美しく輝き、幅広・両刃で大型で、束頭と刀身に紋様のつい
た剣。刀身から迸るオーラ、鋭い切先、芸術品と謳われそうな美しさ
を持つ剣の名は——アロンダイト。

若者、ランスロットはアロンダイトを振るう。

それだけで空間は裂け、内側への道ができた。

空間に泣き喚いて響くのを無視して、その裂け目に足を踏み入れて
姿を消える寸前。

「守護者ばかり仕事してないで少しは仕事しろ、ブラック上司」

そう吐き捨てて、完全に彼の姿は消えた、

残されたのは、自分の発言に後悔に満ち足りた悲鳴を上げる霊長の
抑止力（アラヤ）。

そして、ランスロットの帰還に星が声を上げた……人類が生存でき
る喜びとそれを支えなければならぬことの苦痛の悲鳴を。

——人類と星の生命が維持出来るのだから、頑張つてほしいもので

ある。

魔力の粒子によって練られた漆黒に染まった極光、光を呑み込む闇を眼前にランスロットは冷静にアロндаイトで真つ二つに斬り裂いた。

呆気に捉えたのは、この特異点F終了後に人理修復の旅をするオルンジ髪の少女、藤丸 六華とデミサーヴァントであるマシユ、そしてオルガマリー所長……三人の背後にはキャスターであるクーフリーンの姿もあった。

「やれやれ、ようやく戻ってきたと思いきや……まさか王と対峙するとはな」

「……貴様、まさかランスロット、なのか？」

「お久しぶりです、我が王よ……ずいぶんと御姿が変われたようで」

黒ずくめの禍々しい甲冑と金色の瞳の女性騎士、主君であるアルトリア・ペンドラゴンが眼前にいた。

アルトリアは最初は啞然としていた様子だったが、次第に表情が変わっていく——笑みを浮かべ、涙が瞳から零れだして叫びだした。

「……フ、フフ、フハハハハハハハッ！ ランスロット！ ああ、ランスロット、ランスロットオオオオオオ！ 遅いじゃないか、私がお前を待ってたのだ！ ずつと、ずつとずつとずつとお前を待ってたのにつ、なんで帰ってこなかったっ！」

狂ったように笑い紡ぎだす言葉の途中に涙声が混じり、まるで迷子になった子供が親を見つけたような喜びも混じっていた。

「……」

「ずつとずつと、頑張ったんだぞ？ お前がいなくなっても、みんなを纏めて王としてふるまって……でも結局、結局——っ」

先ほどまでの振る舞いが嘘のように、子供のように言葉を紡げるアルトリアの姿。

そんな彼女を六華は切なく思い胸元に置いた手を握り、マシユは涙を流していた——なぜ涙を流しているのか分からない、彼女の姿を見て知らずと流していた。

クーフリーンも憐憫に思い表情をゆがめ、オルガマリーは既視感を覚えたが自然と納得した……目の前にいる彼女は嘗ての自分だと——誰も認めてもらえずに孤独になっていった自分だと。

「なんでっ、なんでっ、戻ってきてくれなかったんだっ。 どうして、そいつらのためにっ！」

「もういい……もう語らなくていいんだ、アルトリア」

紡げ続ける彼女にランスロットはアロンダイトを構えた——決意を込めた目で彼女を睨んだ。

「お前を蝕んでいた絶望も苦しみも受け止めてやる……それがお前たちを置いて消えてしまった俺のやるべきことだ」

そんなランスロットの決意に同調するように、アロンダイトの刃が煌めいてはオーラが迸る。

そして、戦う前にランスロットは背後にいたマシユに顔を向けて笑った。

「よくやった。 王を相手にしてもよく諦めなかった——強くなったな、さすがは俺の」

「え？」

最後に紡げた言葉にマシユは聞き取れなかったものの、それでも心中に広がるのは歓喜と敬愛の気持ちだった。

だが、それよりも疑問が強く思わず聞き直してしまう姿に、寂しさを覚えたのかランスロットは目をつむっては逸らした。

「……いや、なんでもない」

ランスロットはそう言ってアロンダイトを構え直して、アルトリアに向けた。

「さあ、行くぞ。 アルトリア……お前の苦しみを受け止めてやる」

「ああ、ああ！ 行くぞ、ランスロットオオオオオオ！」

戦力増加（剣士と槍兵）

人類最後のマスター、藤丸 六華が目を覚ましたのは、冬木での騒動が解決してから翌日の午前だった。

幸いにもレイシフトは無事に完了し、帰ってこれた——ランスロットも一緒であったために当日はカルデア中が大騒ぎとなったものの些細なことなので閑話休題。

次なる特異点が発見され、それに向かう前に彼女たちはとある部屋に赴き、新たな仲間を呼び出そうとしていた。

——守護英霊召喚システム・フェイト。

レフが爆破させたことよって、システムに異常が発生したために来なかつたが、ダ・ヴィンチの手によつて修理は完了した。

これを起動させることで、英霊を召喚することができる。

あまりにも火力が足りない上に少な過ぎる。これから各特異点に出現するであろうサーヴァントたちを相手にするにはマシユと、特異点Fより仲間になったランスロットだけでは決定打が欠けていた。

このまま進めてもあまりにも戦力不足であるのは明らかだった。

基本的に絶対的な攻撃力を兼ね備えたランスロット。

火力の代わりに圧倒的な防御力を兼ね備えるマシユ。

戦力増強の為に召喚は必要性がある。また召喚のためにはカルデアの電力と聖晶石——高純度の魔力結晶——と呼ばれる石で魔力を精製するだけで良い。

召喚の準備のため、特異点Fの人理修復から数日間——立香、マシユ、ランスロットの三人は、こまめにレイシフトして聖晶石の欠片収集に当たり、何とかサーヴァントを二騎召喚できるまで集めた。

しかし、この召喚システムでは英霊だけでなく、偶に武器や礼装といった魔力が込められたアイテム——概念礼装が召喚される。しかもどちらが召喚されるかもランダムなので、完全な運任せ。

「あの、ドクター……折角の聖晶石がゴミになるのは些か苦痛なのですが」

「それだけだったら、まだいいよマシユ。 仮にサーヴァントを召喚

に成功しても、六華ちゃんを襲う場合もあり得るんだよ……失敗しても個人的にはゴミでも何でもいいさ」

「まあそれは安心したまえ。そのためにもかの有名なランスロット卿が六華ちゃんの傍にいてもらっているんだ、そうなたら彼が何とかするさ！」

「……人任せにもほどがあるな、ダヴィンチよ」

ランスロットはため息をつきながらも、六華の傍らに付いた。

ロマンの言う通りに仮に召喚に成功されたとしてもマスターに襲い掛かる可能性もなくはないので、何時でもアロンダイトを抜けるように常時に構えている。

六華はゴミが出ないよう祈りを込めて掌にある三つの聖晶石を握りしめて――。

「それじゃあ……最初の召喚！」

召喚サークルの中央に投げ入れた。

すると召喚サークルが発光を始め、やがては光が魔方陣の外周を描くように回り出し、次第に円を作り出す。

光は1つに収束し天に突き刺さるように伸びていき、そこから光は再び強くなり、光の帯となっていく。

やがて光は収束し人影が見え始めた。そしてマスター権限で六華にはそのクラスが見えた。

「……あつ、セイバーだよ！」

「えっ、す、すごいです、先輩！ 『三騎士』の一角で「最優」と称されるサーヴァントを呼び出せるなんて……っ！」

まさかの一発でサーヴァントの召喚——しかも三騎士の中でも最優ともいえるクラスの召喚に成功したことにマシユは驚愕と同時に六華を評価する。

そして光が消え、人影が完全に人として姿を見せた。

その姿は金髪を大きな黒いリボンでポニーテールに結えているのが特徴。胸部を守る鎧の下の衣服は白を基調とした背中や腋が大きく露出した少女だった。

「初めまして。私はセイバーのサーヴァント、ですが——まだ半人前

なので、セイバー・リリイとお呼びください」

その姿を見て、全員が呆気に捉え、ランスロットは驚きの表情を浮かべた。

全員はその姿を特異点Fで戦ったセイバーオルタの幼き姿であることに。

そしてランスロットは、過去の彼女——服装は男装のもので、目の前にいる彼女のように華やかではなかったが——が召喚されたことに。

「？ あの、皆さんなにか……………あっ!？」

そう言って、彼女——セイバーリリイはランスロットの姿を見ると笑顔になり駆け寄ったと思いきや。

「ランスロット!」

大胆にも彼に抱き着いてきた。

「むっ…………!?!」

ランスロットは戸惑いと驚愕に満ちた声を上げた——過去の彼女はこのような行動をとったことはないはずだが…………。

「わあっ…………!」 「は、はわわわ」

「おお、大胆だねえ」

セイバーリリイの行動に感銘したり、戸惑いの声を上げたり、からかいの声を上げる女性陣。

「また会えて嬉しいですっ! 今度は足手まといにならないでマスターと一緒に精いっぱいあなたについていきますね!」

「…………ああ。無理しない程でいいからな、アルトリア」

「はいっ、頑張ります!」

「さて、俺へのあいさつを一通りに終えたのならば今度はマスターである六華にもな」

「はっ! そ、そうでしたね…………私としたことがっ!」

ランスロットは優しく微笑んでは彼女の背中を押して、マスターである六華にあいさつに向かわせる。

セイバーリリイはすぐさま六華とマッシュに話しかけ、僅か数分で微笑みを浮かべて会話を始めました。

その様子をランスロットは怪訝に見つめ、そんな彼をロマンが首をかしげながら言葉をかけてきた。

「どうしたんだい、折角の再会なんだろう？ 何をそんなに……」

「お前だけには話しとくか……推測だが彼女は俺の知っているアルトリアではないかもしれん」

「へっ、ど、どういふことだいっ!？」

「俺の知っている彼女はあのように華やかではなかった……ズボンとシャツを着た質素な男装したものだ」

それなのに何故セイバーリイが白を基準にしたドレス姿のもの……これは一体どういうことなのだろうか。

様々な疑問が思い浮かべるものの、今とりあえずは戦力増加を優先にすべきだろう——これからの時間でそれは解決するだろうとランスロットは切り替えて、六華に声をかける。

「ほら、六華もマシユもリイも。 召喚の続きをしないか」

「あっ、はい。と——ランスロット卿！ 先輩、続きをお願いします！」

「えっ、あっ、ごめんね！ それじゃあ二回目——いつきまああす！」
ランスロットの注意に、慌ててマシユが六華をせかし、その六華も慌てて聖晶石を投げ込む。

するとセイバーリイを召喚した時のように光が辺りを照らした。

やがて光は収束し人影が見えてくる——全身が青装束で手には確かに紅の槍を持った見た目からして戦士。纏う雰囲気は野性味があり、猛獣のような物を感じなくも無い

そしてその雰囲気と青髪には冬木に行った全員に覚えがあった。

「……おお!! 嬢ちゃん二人かつ、それに騎士の旦那に……セイバーだああっ!!? なんだこのサプライズの連続はよお!!?」

「クーフリーンツ!!?」

「おうよ！ 嬢ちゃんよ、この前と違って槍兵として務めてやるぜ！
くうう、やっぱ槍は良いなあ！」

二人目の仲間——アルスター伝説の英雄、クーフリーンは気分よく槍を起用に廻す。

新たな仲間が召喚されたことに喜ぶ中、ランスロットは彼に近づいては耳打ちを行う。

「ふむ……近距離が俺を含めて三人か。些か遠距離に不安はあるが、それは小手先で補っていくか……クーフリーンよ投てきは得意か、特に石の」

「ああ？ まあ得意ちゃあ得意だが……ちよつと待て。あんた、仮にも円卓の騎士だろうがっ!？」

「騎士道精神が云々の前に、まず六華たちの命が大事だ。悪いが遠距離の仲間ができるまで、必要に応じてやってもらおうぞ」

「つたく、俺はランサーなのによ……まさかの遠距離だあ？ 冗談じゃねえぞ」

ランスロットの言葉に頭を抱えながらも答えるクーフリーン。そんな二人の言葉がわからず六華とマシユ、セイバーリリイは首をかしげる。

「お前たちはまだ知らなくていい事さ」

三人の反応に苦笑しながらランスロットは切り捨てては、次いでロマンに視線を向ける。

「六華ちゃんとマシユそしてみんな——本当だったら親睦を深めたいところだけど、これから君たちには特異点に向かってもらいたい。本当に急なことだけどごめんね」

「おいおい……だがまあさっそく俺の槍の腕前を見せてやろうじゃねえか。んで、軟弱男よ、場所はどこだ」

「はいはい！——そこはダヴィンチちゃんが発言しよう——場所はフランスで年は1431年による丁度百年戦争のときだね」

* * * * *

旅が始まる。

人理修復の『歴史を正す』旅が。

長く険しい道のりを歩むことになるが、それでも彼女は後輩と共に前に進み歩いていく——騎士と新たな仲間たちとともに。

藤丸六華の長きにわたる旅がこれより始まった――。

騎士と聖女とマスター

第一特異点から第三特異点まで六華はマシユとランスロット、召喚されてきた仲間たちとともに人理の修復を成功してきた。

召喚されてきた中にランスロットの顔見知りが出て、感動の再会もあったが、それはまた別の話——後程語られるものなので置いておく。

第三特異点が修復成功して、次なる特異点に向かう前の休暇を前にして——。

「あ、あのお、ランスロットさん？」

「マ、マルタさんもどうして……」

カルデアにある休憩部屋にて六華とマシユは何故かダブルベットで横に布団をかぶせられていた——カルデアのオトンとオカンと云われている、ランスロットとマルタの二人の手によって。

二人はベットの上で隣同士で座り、ランスロットはマシユの頭を撫で、マルタは六華の頭を撫でていた。

「お前たち二人は強制入眠だ、仕事も何もかも忘れて横になつてろ」

「彼の言う通りです。あなたたち二人は働きすぎ……ですがあなたたちはそれを言っても聞かないだろうと思ひまして、やりすぎではと思ひましたがランスロットの手助けをしました」

「ふっ、といつてもお前は少しばかり乗り気だったのではないか……」

『あの子たちは働きすぎよ』と息巻いて」

「う、うるさいわねっ、余計なことを言うなバカ！」

ランスロットの意地悪い笑みに反応して大声を上げては荒々しい声で叫ぶマルタ。

そんな彼女に驚愕する二人にマルタはハッと気づいて空咳をしては優しい声で紡げる。

「マ、マスター、それにマシユ？ 貴方たちは普通の人間……休めるときには休まないよ次の特異点に立ち向かえませんか？」

「おいまで、俺も人間なのだが」

「どこの世界に幻想種やゲデモノをバーベキューして焼いたり、鍋に

煮込んで食べて、しかもタラスクまで食べようとした奴がどこがどう人間なのよっ!？」

大声を上げて突っ込みをいれるマルタに（確かに）と心の中では同意をする六華とマシユ。

第一から第三の特異点の間、ランスロットの荒唐無稽な行動に全員は驚愕と呆れることが多かった。

・厨房に赴いたと思いきや、カルデアのスタッフたちに手料理を振る舞ったり。

・愛剣アロンダイトでサーヴァント相手に手玉を取り、巧みな剣術で翻弄しては斬り捨てたり。

・魔神柱をアロンダイトの力を解放したことで一人で斬り捨てたり。

・本来危険且つ手間を取るはずの幻想種——特に最強と謳われている竜種——を斬撃で斬り捨て、料理にして全員にふるまっては食べた。

・ゲデモノ——蛇や触手のなにかを——を倒したと思いきや、自らの手で焼いて食べたり、煮込んだりしていた。

他にも色々なことをしてかき、そんな彼の行動に頭を悩ます仲間たちもいれば、「さすがはランスロット……っ！」と崇めたり尊敬したりする仲間もいるのだが……そこはご愛敬。

「あつ——コホン！ とりあえず、マスターたちはお休みを。後の仕事は私たちがやりますので大丈夫」

「で、ですが、先輩はともかく私はドクターや皆さんのサポートを——」

マシユはそう言って身体を起こそうとしたが、ランスロットの手が彼女の頭を触れると同時に優しく押し倒した。

「いいから寝てろ……第三特異点まで戦ったり働きたらなはなはだんだ、少しばかりはゆっくりしろ」

「で、ですが」

ランスロットの言葉に尚反論しようとしたマシユの額を優しく指差して、

「仮にその状態で働いても、次の特異点で疲れが出ては倒れこむのがオチだ……休めるときに休め。体調管理も仕事の一つだ——お前の盾はもう立派な戦力なんだからな」

「……むっ、そ、そう云われてしまうと断りにくいです」

不貞腐れたようにマシユがそう言うのと、ランスロットの手が額から離れると同時に彼女は布団を頭から被った。

布団から若干見れる耳元が赤く染まっているのを見て、どうやら照れている様子。

次いで六華のほうに目を向けると、マルタの優しい手つきで頭を撫でられている姿が見受けられた。

彼女も恥ずかしそうにしながらも決して拒否はせずに受け入れている様子があつた。

「やれやれ、普段もそうやって甘えればいいものを……」

「む、無理云わないでよっ、ランスロットさん!? 恥ずかしすぎるよ!？」

「いや、むしろ甘えてこい。お前たちはまだ十代後半だぞ……さらに人理修復も行っているなどありえん。こういう場合だからこそ甘えるべきだ」

何とも横暴で勝手な発言……それがオトンの台詞なのだろうか。

六華は不満げな表情を浮かべて頬を膨らませると、ランスロットはため息をついて——。

「やれやれ、それではネロ・クラウディウス特別の子守歌の用意を」

「今からおやすみなさい!」

ランスロットが最後まで言葉を紡げる前に六華は叫んだ……どうやら効果はてきめんのようだ。ランスロットは満足げに頷くと、マルタは呆れたように目を向ける——その手はずつと六華を撫でながら。

「あなたねえ……何えげつないことを考えているのよ」

「それじゃあお前が歌ってやればいいだろう。厨房で鼻歌をしながら作っていたのを聞いたが、お前もなかなかのものだったぞ」

「ちよっ、あんた何言ってる」

「照れる必要はないだろう、とても上手かったぞ……ちよっどいいか

ら二人に子守歌代わりに歌ってやれ」

「勝手に決めんなっ……ああもうマスターたちはそんな目で見ないでよっ!？」

マルタの歌と聞いて、六華は期待の籠もった目で見つめ、マシユは遠慮して目を逸らすだがそれでも時折視線を向けていた。そんな二人の期待を無碍に出来ないマルタはため息をつきながら、「あんまり期待はしないでよ」と言ってから一度深呼吸をする。

そして——彼女の歌が奏でられる。

* * * * *

マルタ特有の美しさに相まって、彼女自身の歌唱力と良質な楽曲が休憩部屋に静かに響く。

優しいメロデイが子守唄のようで歌に包まれるようであった。

やがて終盤となったのか彼女の歌は紡ぎ終えたのか口を閉ざしては——勢いよく息を吐いた。

「はあ、終わったっ。もうこれで満足です、か？」

マルタの言葉に誰も反応しない。よく見ると六華とマシユは寝息を立ててほころんだ表情で眠っていた。

その寝顔を見てマルタは優しく微笑みを浮かべては六華の頬を優しくなでる。

小柄な身体、柔らかい頬、細い両手足——まだ十代後半だというのに背負った重さは比例してとてつもなく大きい。

とても少女が抱えるものではない……それでも彼女は第一から第三までの特異点を旅して乗り越えた。

これからもまだ続く旅路をマルタは支えようと決意した。その決意をランスロットに話そうと声を掛けようとしたとき。

彼の身体は倒れこんで、マルタの膝に寝転がった。

「ちよっとうし、たのっ……っつて」

彼の顔を見ると、寝つきのいい顔で寝息を立てていた——どうやら彼もマルタの歌を聞いて眠ってしまったようだ。

顔には出ていないだけで彼も疲れていたようであった。考えてもみれば、彼は特異点Fから第三特異点まで出撃しつつも、カルデアの

一般スタッフたちに料理を振る舞ったり相談したりし続けていた。

サーヴァントであれば問題はないだろうが、彼は人外的強さを持つていても一応は人間であることすっかりと忘れてしまっていた。

「ちよ、ちよつと、あんた起きなさいよつ」

しかし、それでも気恥ずかしさで顔を赤くしながらマルタは小さく声をかけるも、ランスロットは起きることはなく、小さな呻き声を上げて彼女の膝に擦り寄った。

「ひやつあ、ちよつあんた」

マルタが恥ずかしそうに声を上げるも、ランスロットは満足気に笑みを浮かべていると同時に再度寝息を立てた。

「——んんっ、もうっ」

諦めた様にマルタが大きく吐いては、六華に撫でた様にランスロットの頭を撫で始める。

「……………カ」

「ん？」

一瞬何か小さなつぶやきが聞こえたものの、上手く聞き取れずにいたマルタであったがそれを気に留めずに彼の頭を撫でる。

「三人とも……………次の特異点までおやすみなさい」

普段頑張っている三人に優しく声を掛け、マルタはランスロットの頭を優しくなで続けていく——。

（あ、あの姐さんが女の顔になってるっ。こ、これはレアものだあつ！）

そして、そんなマルタの様子を宝具であり相棒でもあるタラスクが感銘に満ちた目で見ていた。

普段は聖女として、姐さんとして振る舞っている彼女が一人の女と成っていることにタラスクは嬉しく感動をしていた。

……しかし、その感動をマルタの前でポロリと喋ってしまい、
思い切り殴り吹き飛ばされたのは後日談として語ろう。

背中と夢

周囲は幻想種や竜牙兵、ゴースト、シャドウサーヴァント等々出現する。

出現して襲い掛かってくるエネミーを、目の前にいる彼は黒曜に輝く剣——アロндаイトで蹴散らし薙ぎ払って進んでいく。

その背中を追いかけるように、マシユも盾で薙ぎ払って蹴散らすも、多勢に無勢でまた実力が伴わないのか彼女は彼とは逆に薙ぎ払われて、地面に転がってしまう。

痛みにこらえながら立ち上がるも、彼の背中は既に遠く離れていた——目を凝らさなければ見えないほどに。

(遠い……)

その背中はとても遠かった。いつもは近くで一緒に戦っているはずなのに、腕を限界に伸ばしても届かない——。

彼の名前を声に出しても、届かないし聞こえないのか、更に遠くなくなっていく。

置いて行かれたようでマシユの心は冷えるようなそんな感覚を覚えてしまう。

『それが今の君から見える■■■の背中さ……』

いつの間にか、隣には彼がいた。

同じ薄紫色の髪、暗紫色の騎士甲冑鎧そして盾を纏った少年騎士が……遠いあの背中を眩しげに見つめていた。

『僕は、僕たちはあの背中に憧れて追いかけた……それでも届かない。いつも先に行ってしまうあの人を、時々憎らしく思うんだけど……それ以上に誇らしく思ったんだ』

『いつかはあの人の隣で。僕はそう思ったよ』

騎士が語るその横顔は誇らしげで、眩しそうに目を細めていた。『自分の生き方を決して曲げず、後悔するよりも同じ間違いと悲劇を繰り返さないようにする努力を続けるあの人を……僕は今でも追いかけているよ』

そう言って身体を動かして、マシユ・キリエライトと向き合う。

『でも今の君と僕の違うところは……まだ君は■■■の背中には任せられていないところかな。僕が君くらいの年頃だった時、一応は背中を任せられていたよ？ まあ、僕とあいつとペディでようやくだけどね』
自慢げに語られる彼の言い分に苛立ちを覚えたものの、その言葉は正しいので否定しないでそのまま耐えるマシユ。

F特異点から第三特異点までマシユは彼と一緒に戦ってきた。

だが、極力危険な目に遭わせない様に行動してるフシが所々で見られる。一番強いサーヴァントや幻想種に真つ先に一人で向かっていき、被害を最小限にする素振りが見られていた。

裏を返せば、実力を信じていないことに繋がる。マシユたちが負けて死んでしまうと考えてるからこそ、その役目を担っているのだ。

『これからはもつと厳しい戦場が君を待ち受けているだろう。今の実力では役に立つどころか野垂れ死にするのがオチだ……だからこそ強くなるんだ、マシユ・キリエライト』

『史上最高で最強の騎士である■■■の顔を、僕たちの誇りを汚すようなことは決してするな』

騎士は厳しい眼差しとともに告げられたその言葉にマシユは頷く——自分が弱いのなら強くなるしかない。至極簡単に難しい事でもあるも、やるしかないと自分に言い聞かせるマシユ。

『僕の代わりにちよつと変わり者で天然な■■■を護ってくれ』

そう言って彼は歩きだしていく——遠く離れた彼の背中を追いかけるように。

* * * * *

街並みが夕焼けに染まり、影が伸び始める時間帯。

二人の親子が手をつないで歩いていた——いつも見慣れているカルデアのオトンと云われている男と、もう一人は腰に木剣を差した後輩に酷似した男の子だ。しかし、男の子の顔は薄汚れて身体全体もボロボロになっていたが、決して泣くことはなく寧ろ誇った表情でいた。

『ふふ、男の勲章だ。　ようやく勝てたな』

『……むっ、ですが女の子が相手だから、誇れるものじゃありません』
『おいおい、その女の子を相手にボロ負けして帰ってきたのはお前だろ。』

その言葉を聞かないふりをしてか男の子は顔を逸らして、フンツと鼻を鳴らす。

『やれやれ、その負けん気と意地の強さは誰に似たのやら……まあ今日は誇るべきだ——っ！』

『うっ、わああっ』

男——ランスロットは意地悪く笑うと同時に男の子を抱き上げては肩車をした。

『■、■■！　やめてください、恥ずかしいです！』

『恥ずかしがるな。全くお前はとも子供らしくない……嬉しい時には嬉しいと云えばいいものを——素直ではないお前にはこれほどの罰はないだろ』

ケタケタと意地悪く笑う彼に男の子は恥ずかしさと不満げな表情が混ざり合った複雑な表情を浮かべながらも、どこか嬉しそうにランスロットの頭に寄り掛かった。

『よく最後まで諦めずに戦ったな。俺はあの姿を誇りに思ったぞ……流石は俺の——』

その言葉が最後まで紡がれることはなかった。突如、目の前に映った光景が歪みだす。

次いで出てきたのは鎧を纏った金髪少女と、成長して青年となった男の子が対峙している場面だった。

『あの時の泣き虫野郎が騎士になっっているなんて思いもしなかったぜ……あの人の部隊に入ろうとしているんだって？』

『だから何だい？　君には関係ない話だと思うけど？』

『はっ、大ありなんだよ！　こっちとらあの時の借りを返したかった

ところだつ、それと俺もあの人の部隊に入りたいんでな！ てめえを倒して、俺が先に入ってやるっ！』

『……僕も、あの時のような弱虫じゃない。今度はこっちが勝ち越してやるっ！』

そう言つて少女と青年が手に持っていた刃引きした訓練用の剣が交じり合った――。

『残念ながら今日はここまでとさせていただきます、マスター。　続きは次の機会でお願ひします』

「あつ、おはようございます。先輩」

「ん……っ、あ、おはよう、マシユ」

マシユと六華は寝付いたまま、互いの寝ぼけ顔を瞳に捉えながらも挨拶をする。

二人の視線は眠気に捉えられながらも周囲に動かし、あたりの把握を行うと。

『……………』

ランスロットがマルタの膝枕で眠っており、彼女はそんな彼の頭に手を添えて眠っていた。

見るだけで少々恥ずかしくなるような光景で思わず二人は頬を赤く染めてしまう。

「マ、マシユ、提案なんだけど……もう少し寝てようか？　二人の邪魔をしちやまずいし」

「そ……そうですね――そ、それではおやすみなさい。先輩」

「う、うん、おやすみなさい」

そう言つて二人は再び瞼を閉じた――二人の心中では恥ずかしさ

もあつたものの、若干の期待があつた。
またあの夢の続きが見れるかもしれないという期待に……。

叛逆と殺人鬼

『……………』

十九世紀のロンドン。人類史のターニングポイントとして産業革命が起きたその時代が4つ目の特異点。

この第4特異点ロンドンでは魔霧というものが発生しており、ただ人間では死に至るほどの魔力がある

そんな場所にて問題が発生していた。

かと言ってそれがカルデアを揺らす程の問題かと問われたら、可とも云えるし不可ともいえる、非常に曖昧なものだ。

だが、いまこの特異点にいるカルデアのマスターとその仲間たちにとつてはとても重要な案件である。

立華とマシユは疑惑に満ちて、マルタはにっこりと微笑みながらも頬は引き攣り指の骨を鳴らしていた、クーフリーンは愉快気に、セイバーリイは目を見張つてその光景を見つめていた。

全員の視線の先にいるのは、カルデアの切り札ともいえる存在で頼られる存在であるランスロット。

そして彼の両腕には――。

「ねえ離れてよ！ わたしたちのお父さんに触らないで！」

「ああ!? てめえこそすつこんでろ！」

銀髪の黒いマントを羽織った少女がランスロットの右腕に抱きつき。

鎧をまとった勝気な切れ目で、騎士の鎧をまとったセイバーリイに似通っている顔つき少女が左腕に抱きついていていた。

二人の少女がランスロットの両腕を占拠して、叫びあっていた。

「違うよっ！ お父さんはわたしたちのお父さんなんだもん！ お母さんの中でずっと見ていたんだから！」

「てめえは何素っ頓狂なことを言っていやがるっ、ランスロットは硬派な独身だったんだぞっ!? 忌々しいことにあの盾野郎はいたがっ、この人に妻はいなかったんだ！」

互いに睨みあいながら叫びあう二人にランスロットは頭を抱えた

なくなった。そして思う——いったいなぜこんなことになったのだろうか。

* * * * *

まず最初に六華たちがロンドンに無事レイシフトしたことから始まった。レイシフトの方も何の問題もなく成功したが……ロンドンに来て早々に戦闘が始まってしまったのだ。

マスターのいないはぐれのサーヴァントとして喚ばれたモードレッドが丁度良く六華たちの付近で、戦闘していたのを発見して——

『おお、モードレッドじゃないか。久しぶりだな』

『——ピャツ?』

普段の彼女ならば決して上げないだろう素っ頓狂な声を上げた。そして、ここからモードレッドによる怒涛な攻撃と攻め込みで敵は一掃されたの言うまでもない。

戦闘終了後は即座にモードレッドはランスロットの元に駆け寄りては、彼の頬を両手で揉みだして今度は引っ張りだした。目の前にいる彼が確かに存在しているのか確認するかのように。

『……嘘だ、本物、なの?』

『俺はちゃんと存在しているぞ。これは夢でも何でもない、現実だ……モードレッド』

その声を聴いて、ようやく彼が実在していると判断した瞬間。モードレッドの瞳から涙が零れ落ちると慟哭を上げた——先ほどの戦いぶりから想像つかない位、ただの少女のように。

その後、彼女が泣き止んだのは十分後のこと——ようやく落ち着いた彼女から事情を尋ねた。

モードレッド曰く自分以外がアーサー王の国であるこのロンディニウムを汚すことは許さないという、ある意味滅茶苦茶な理由からこの特異点を作り出した元凶と敵対していたとのこと。

そんなモードレッドに協力を促すと、拒否も何もなく『別に構わねえ』と了承。

『俺はランスロットの部下だ。主であり師の命に従わねえ馬鹿はい

ねえ』

『元だろう。お前は出世し円卓の騎士になった……それに部下になったのも一年未満だろうが』

『それでも、あんたは俺の主が変わりないんだよ。多分、あの盾野郎も同じことを言うだろうさ』

そう言つてモードレッドがマシユを見る——その視線は忌々しいものを見るようなもので、マシユは戸惑いを浮かべていたが。何はともあれ、モードレッドそしてこの霧を晴らそうとしている現地民であるジキル・ハイドを仲間にして、彼らはこの第四特異点の人理修復を開始したのだ。

因みにセイバリーリの姿を見た時、「ちっちゃい父上なのかつ!」と驚愕していたのはまた別の話。

しかし、ジキル・ハイドの在宅から出て、霧が立ち込めるロンドン内を歩き進めていくも霧が更にたち籠つていく。その影響でランスロットは六華たちとはぐれてしまい、数時間も探すも見つからずに立ち往生している中で彼女と出会った。

『……お父さん？ お父さんだあつ!』

黒いマントを羽織つた少女がランスロットの姿を見つけたと同時に、笑顔を浮かべて抱き着いてきたのだ。

少女の突然すぎる行動に困惑するランスロットを尻目に少女は彼を見上げる。

その顔を見て、一人の女性が脳裏に浮かんだ。

銀髪にアイスブルーの瞳に幼い顔立ち……決して似通っていない筈なのに、彼女の顔をなぜか思い出した。

『お父さん、お父さん！ やつと会えたねっ、お母さんの中からずっと見てたよ、感じてたよ。 わたしたち、ずっと会いたかったんだ!』
『お母さんとわたしたちを守れなかったお父さん……でも気にしないでいよ! だってこれからはずっとお父さんと一緒にいられるんだからね!』

少女の無邪気な言葉に思い出す。

部屋の椅子に座っていた、黒髪が美しい幸せそうに微笑んで腹部を撫でる彼女。

しかし、その微笑みをランスロットは最後まで守り切れずに……彼女は亡くなった。

腹部に宿っていた新しい命と共に。

『つちー!』

苦く忌み嫌う思い出を即座にかき消すように舌打ちをすると、少女は怯えたように彼から離れて見上げた。

『お、お父さん、怒っちゃった?』

『あ……い、いや、怒っていない。それよりもお前の名前を聞かせてくれないか?』

『えーっ!?! わたしたちの名前覚えてないのお!?!』

覚えてない云々よりも、まず少女とは初対面なのだが……というランスロットは敢えて突っ込まずに『すまないな』と謝罪。

対する少女は膨れっ面になりつつも、嬉しそうに自分の名前を言った。

『わたしたちの名前はね、ジャックだよ! もう忘れちゃダメだよ、お父さん!』

少女——ジャック・ザ・リップパーは輝かんばかりの笑顔を浮かべていった。

その後、ジャックはランスロットと共に行動することになり、立華たちの探索に赴いた。

探索最中に敵勢サーヴァントであるキャスター：ヴァン・ホーエンハイム・パラケルススと対峙することになった際。

『ふむ、私一人では荷が重いですね……丁度良いです。ジャック・ザ・リップパー、わたしと共に戦ってください』

本来ならば彼女は敵勢サーヴァントであり、ロンドンを覆う魔霧の原因の一人であった。しかし、ジャックは自信満々の笑みと共に言い放ったパラケルススの言葉に対して。

『嫌だよ?』

その一言で一蹴された。

パラケルススの余裕のある笑みが固まり、ランスロットは思わず不憫な目で見てしまったのだ。

『わたしたちはお父さんに付いていくよ？ だってお父さんと戦いたくないし、それにいつもパラケルススは薬臭いし嫌いなんだもん』

……その後は簡単なことであった。

キャスターであるパラケルススをランスロットが苦戦することはなく、アロンダイトで首チョンパして終了したのであった。

呆気なくパラケルススの戦闘を終わらせたランスロットはジャックを引き連れ、再び立華たちの探索を開始したのであった。

そして、漸く立華たちと再会したのは数時間後。

帰ってきた主人を迎え入れる犬の様にモードレッドが近寄ると。

『むっ、駄目だよ！ この人はわたしたちのお父さんだからねっ！』

そう言っではランスロットの腕に抱きつくジャックと、周囲の空気が氷の如く冷え切ったのは同時のことであった。

そして、それを気に求めずにモードレッドがジャックの言葉に強く反論しては反対の腕に抱きついてきたことで、冒頭の出来事に戻る。

* * * * *

(さて、どうするか……)

漸く振り返り終えたランスロット。

両腕に抱きついて可愛らしい争いをしている部下と義娘(自称)、そして周囲の視線をさてどうするべきか。

特に立華とマシユ、セイバーリリーの目はキツイ。特異点Fより見守り務めてきたのに、ここでまさかの義娘登場により、まるで浮気がバレた父親のような感覚がして少しばかり居心地悪い。

更にマルタの目も徐々に厳しくなり、終いには殺気混じりの視線となっている……クーフリーンは後でボコボコにすると決意した。

(やれやれ、本当にどうするべきかな)

彼の悩みは終わらない……。

彼を巡って召喚☒

魔霧に包まれたロンドン、魔神柱と化したマキリ・ゾオルケンを倒した藤丸六華一行は、遂に人理焼却の黒幕と対峙した。

魔術王——ソロモンと名乗ったそれは、アンデルセン曰く、グランドキヤスターというクラスで、一般のサーヴァントとは格以と権限が違うとのこと。

人間を有効活用してやると心底楽しそうに語ったソロモンの言い分に腹を立て、つい感情的になって啖呵を切った——。

消えることになる歴史でも、特異点で出会った人々は懸命に生きた。仮初の今を生きる人々をサーヴァントたちや自分たちは救おうとしたのだから。

それを踏みにじるような発言は絶対に許せなかったのだ。

『よく言った、六華。魔術王だがなんだか知らんが、くだらん野望のために今を生きる人たちを踏みにじるような行為をこの俺が許すと思うか』

そんな彼女に続くようにランスロットはアロンダイトを片手に魔術王と対峙した。

『てめえはランスロットの敵だ。主であり師の敵は俺の敵でもある。それにてめえは気に食わねえ……俺の剣でてめえを斬り捨ててやる』

『あれはお父さんの敵だね。だから、私たちも一緒に戦うよ』

彼に続くようにモードレッドとジャック・ザ・リツパーも紡いで、武器を構える。

そんな彼らをあざ笑って、魔術王・ソロモンは己が部下である魔神柱を呼び出し、徹底的に潰そうとしたのだが。

何分相手が悪かったとしか言いようがなかった。

黒曜の斬撃が神速の如く——それこそ他者そしてソロモンからすれば一瞬——魔神柱が斬り裂かれたのだ。

『は……………』

斬り裂かれた魔神柱を見て何が起きたか分からないと云わんばか

りに、ソロモンが呆けた声を出す。

更に追い打ちをかけるように無数の斬撃が襲い掛かり、魔神柱らはバラバラに斬り刻まれていく。

『なっ、ななっ、ななななっ!?!』

ソロモンは見た。

紫紺と漆黒の鎧、フルフェイスの獰猛さを象徴する兜と外套を纏った騎士を、その手に収められている輝きに満ちた黒曜の聖剣を。

(あれは、一体何なのだ、たかが人間の筈が、魔神柱を倒す——？ 何の冗談だ?)

複数体のサーヴァントの手によって一体や二体は倒されることは別に問題はなかった。だが、それ以上の数をたかが一人の騎士で斬り捨てられるなど、何の冗談か?!?

想像を絶する出来事に驚愕に満ちる中で、ソロモンは見た。

騎士の背後に付き従うが如くに立ち尽くしている幻影を。

それが一体何なのか目を凝らすと、そこにいたのは様々な幻想種たち、中には幻想種の頂点に位置する最強の竜種までもが混じっていた。幻想種らはその身に宿る祝福を騎士に捧げ、力となっていた。

スキルで例えるならば、『幻想種の祝福』だろうか。

『なっ、貴様っ、何者だ。いや、何なのだ、その数の幻想種どもはっ!?! 貴様は一体何をしたのだっ!?!』

『ただ喰いまくっただけだ、魔術王のくせに幻想種の味も知らないのか? あれは格別だったぞ』

食べた、食べたというのか!?

人々に怖れられ、外的要因によって生態系が変貌したモノ、ヒトの想念より生み出されたモノ、長寿により上の段階にあがったモノを食べたと!?

とんだイレギュラーの登場に、ソロモンが柄にもなく表情に困惑を見出しながらもランスロットを睨みつける。

そんなソロモンを相手にせず、ランスロットはソロモンの背後にいる魔神柱らを見てこう言った。

『……そういえばお前の魔神柱はいったいどんな味がするんだろう

なっ、見た目は拙そうだが味に期待しておこう、とても楽しみだ』

……なんたることだろうか。

拳句の果てには幻想種のみならず、魔神柱までも食い散らかそうとするランスロットの発言。

彼の特有スキル：雑食EXが発動してしまい、哀れ魔神柱は彼の食欲対象とされてしまったのだっ！

そんな彼の発言に思わず引いてしまったのは、仲間たちのみならず特異点で協力してくれたサーヴァントたちだった。

『マジかよ、ゴールデンにすぎえけどやべえ奴じゃん……』

『……わたくし、食べられませんわよね。狐の姿焼きとかにされませんわよねっ（ガクガクブルブル）』

『馬鹿か、いや馬鹿ゆえにの発言か!? なんだ、あいつは——とてつもないインスピレーションが沸くぞっ！ よし、今度はあの男の食欲・雑食性を利用としたものを書くかっ！』

『……ランスロットさーん、それはたぶん食べられないと思うよお』

『……あれって生物的に食べられるものなんでしょうか？ はっ違います!?! ランスロット卿、生で食べるのはまずいと思います！ せめて火を通してくださいっ!』

『あんたはこんな時に何を言い出してるのよおおおおおおおおおとおおおおとおおおおっ!?!』

『おおい、旦那あ！ 美味かったら、俺にも食べさせてくれ！ 最近はまっちまっとなあ!』

『ランスロットオオオオ！ おれもっ、私にも食べさせてくれっ！』

あんたの料理は久しぶりだから食べたいんだっ!』

『お父さんお父さん！ 私達も食べてみたいっ、お父さんの手料理を食べたいなあ!』

『ランスロットッ、私の分も残しておいてくださいねっ!』

——中には便乗しての発言もあったが、ランスロットはその言葉にサムズアップで返して、アロンダイトを構えた。

……そのアロンダイトも気合が入っているのか、妙に輝きを増していたのは気のせいだろうか。

ソロモンは思った。

(拙いッ、この男と対峙するのは非常にまずいつ！ 魔神柱をたかが斬撃で斬り捨てるその実力はまだ隠されているだろう上に、未知数！)

そして何より……っ！)

(魔神柱をも食い荒らそうとするこの男がいったい何者なのだっ!?)

魔神柱をも捕食対象として見ている、ランスロットの実力はいったいどれほどのものなのかっ。

ここで戦えば、下手をすれば敗北してしまうのは——己であることが理解したのだった。

だからこそ彼は屈辱に満ちながらも、いますぐここですべて焼却したいと思っても。

『……興が削がれた。私は帰る』

——帰還することにした。

『あまりにも幼い人間よ。人類最後のマスター、藤丸六華よ。これは私からの唯一の忠告だ。おまえはここで全てを放棄する事が、最も楽な生き方だと知るがいい——灰すら残らぬまで燃え尽きよ。それが貴様らの未来である』

『訊かせろ。貴様は何者だ?』

『湖の騎士ランスロット』

『湖の騎士ランスロット……覚えたぞ貴様のことは。貴様は私直々に今度は全力を以て葬ってやる!』

魔術王ソロモンはそう叫んで、姿を消した——彼の根城であるどの時代からも切り離された神殿に。

こうして特異点『ロンドン』の戦いは漸く幕を下ろしたのだった。

しかし、後にランスロットはこう語る——「ロンドンよりも召喚室のほうがとても大変だった……」と。

湖の乙女

食堂でのピークの時間帯はようやく過ぎ、一通りの落ち着きを取り戻した。

厨房を担当していたランスロット、ブーディカ、マルタは一息ついて、とあるテーブルににお手製の賄い飯とお茶を飲みながら、談笑して食べ進めていた。

何気ない話題で盛り上がるのはブーディカとマルタで、ランスロットは時たまに相槌したり会話に紛れることもあるが……やはり女性陣のほうが盛り上がりはすごいために少々疎外感を感じている。

そんななかで、ふとブーディカが思い出したかのように言葉を紡いだ。

「そういえば、ランスロットのサバイバー知識っていうのかな、どこで学んだの？」

「……いきなりだな、ブーディカ。なぜそれを聞く」

「あんたのその食歴がゲデモノと謎の生物すぎて、一体何をどう食べたらそうなるのかって気になってたのよ。というよりもその原点は何よ。ウチのタラスクを食べようとするその姿勢は」

「そうそう。その所為で、皆が使う騎乗用たちがランスロットを怖がっているんだから——そもそもランスロットがそんな風になったのはどうしたのかなって気になっちゃって」

ブーディカの言葉に気まずそうに眼を逸らしながらお茶を飲むランスロット。

実はこの男、サーヴァントたちが使う騎乗・宝具用に使用される幻想種や生物たち——特にペガサスを見ての発言が次のように出た。

『ペガサスの程よい部位は馬刺し。他はバーベキューで食べてもいいかもしれない。どれ調味料の準備をしておくか』

その言葉で殆どの幻想種と生物たちは即座に引き籠り、紫髪のライダーからは『食べないでくださいっ、あの子はそんなにおいしくありませんからっ！ お願いですっ、やめてください！』と涙声になりながらランスロットの足元に縋りついてきたのであった。

ランスロットに向ける視線は冷ややかになり、彼はとても肩身が狭かった。

いまだにライダーのサーヴァントたちからは慄く目で見られているのだ……不用意な発言は避けたほうがいいかもしれない。

しかし、ランスロットは諦めない……いつかあのペガサスを馬刺しにして食べてみたいと希望を持っている。

あのペガサスは十分に鍛えられているし、ランスロットがいたあの世界でのペガサスよりも若干固いかもしれないが……それはそれでいいかもしれない。

「食べんじやないわよ、ランスロット」

「食べたら、私とマルタのフライペンが飛んでくるから覚悟しといてね」

そんなランスロットの脳裏を読んだのか、マルタとブーデイカが微笑みながらも睨みつけると云った器用なことをして釘を刺した。

彼女たちの言葉を聞いて、心中では舌打ちをしてお茶を飲み干すランスロット。

「……それで、俺のサバイバル能力についてか？」

「そうそう！ それって独学に身に着けたの？ もしくは誰かに教わ………れないか、君みたいな人がそう何人も」

「いや、教わったぞ」

唐突の、まさかの発言に二人は目を点にしながらランスロットを見つめている。

まさかランスロットに師がいるとは思いつかなかったブーデイカとマルタの視線を気にも留めず彼は話を続けだした。

「森や湖に棲んでいる生物の特徴と食べ方、生き抜くための知識を学んだ。いや……それだけじゃない、彼女は俺に戦い方を、剣を少しながら鍛えてくれた人だった」

懐かしそうに語る彼であるも、内容が内容のためにあまり微笑ましくなかった。

この人外とまで言える程の強さを誇る男を育てた師は一体どんな人間なのだろうか……想像つかない二人である。

ブーディカは恐る恐るとお茶を飲みながら、彼の師について尋ねる。

「そ、それは中々ハードだね……一体どんな人なの、ランスロットにその知識を与えた人は」

「俺の母だが？」

まさかの発言にマルタとブーディカが口に含んでいたお茶が勢いよく吹かれて、ランスロットの顔にぶちまけられた。

「おい、お前らな……」

「ぶはっ、げほっ……ぐふっ！ あうあ、おおぐっ！」

「あ、あんた、母親に教えてもらったわけっ!？」

ブーディカが女性にあるまじきむせきかたをしているなかで、マルタはランスロットに詰め寄った——その表情は信じられないと云わんばかりのものだった。

何故二人がそんな反応をしているのか不思議さを抱きながら、濡れた顔を手元にあつたハンカチで拭いながら答える。

「ああ。俺の母、湖の乙女は美しいと称されているものの……中々スパルタでな。生き抜くためには剣は勿論、周囲の生物や草木を食べられるようにしなくてはいけないと俺を鍛えてくれた。彼女が創ってくれた水棲馬（ケルピー）のステーキはとても上手かった、あれが母の味と云う奴だろうな」

「普通息子にそんなことを教える……?？」

「いや、今となって彼女の教えはありがたい。これまで生きてきた中で学んだ剣術とサバイバル能力は今でも役に立っているからな」

……確かに剣術に関しては見事なものだ、それは称賛に値する。

だが問題のサバイバル能力——技量は兎も角、食に対する貪欲、ゲデモノや異なる生物たちへの食欲、雑食性はすべて母であり師……湖の乙女の所為であることが判明した。

しかし、これが事実だとしたら、アーサー王伝説に記載されている湖の乙女のイメージが完全に壊れることは間違いなかった。

湖の精霊と人間の中間に挟まれながらも、美しく高貴な存在として彼女は描かれていた。

これがまさかランスロットの師であり、彼の雑食性・食欲を大きく歪ませた挙句に彼女自身もまさかの雑食性。

しかも息子の為とはいえ妖精の水棲馬（ケルピー）を食用にさせるとはだれが思いつくだろうか、いや誰も思わない。

「いかなな……久々に思い出したら、水棲馬（ケルピー）を食べたくなったつ。すまんが、少しだけ出かけてくる——今日は馬肉料理だ」ランスロットはそう言って、席から立ち上がる。壁に立てかけていたアロンダイトを腰に差し込む。

……心なしかアロンダイトの輝きが若干薄れ出て、半ば呆れたような感じが漂ったのは気のせいだろうか。

マルタとブーディカは、彼を引き留めようとしなかった。

恐らく湖の乙女に関しての驚愕と衝撃が強すぎたためか、行動に移すことが出来ないのだろう。

「それじゃあ行ってくる」

彼は微笑んではそう言って、食堂を後にして向かった。

そして、本日の夕食は馬肉を使った料理であったことは報告しておく。

全員が馬肉料理——まさか幻想種の一つで、妖精の水棲馬であると知らずに——を堪能している中で、紫髪のライダーはそれを見ては自らの宝具であるペガサスの様子を確認したことは別の話である。